

〈書 評〉

自閉症スペクトラムの症状を 「関係」から読み解く

—関係発達精神病理学の提唱—

小林隆児（著）

ミネルヴァ書房

(ISBN 978-4-623-07912-4)

A 5 判 292頁 3,500円＋税

本書は、「むすびにかえて」で著者が記したように、38例の事例を取り上げ、詳細な解説を行いながら、ライフワークである自閉症スペクトラム研究に一応のけりをつけた症状論（精神病理論）を纏めたものである。書評を依頼された評者はワクワクしながら、読み終えた。

第Ⅰ部の第1章では、ヤスパースの精神病理学にまで遡り現代精神医学における臨床診断の重要性について触れる。DSM 登場以前に精神科医になった評者の世代には、懐かしさ以上に改めて新鮮に読み、襟を正した。DSM 登場以後の世代の方々にも、出来れば興味関心を抱いていただき、古典である関連書を手にして欲しいと願う。さらに土居健郎の名著である「方法としての面接」（土居、1992）の中で触れられているファインシュタインの紹介文を元に、著者なりの「症状が確立されるまでのプロセス」について詳述し、症状から「関係」をみることの重要性を指摘する。この章は、短い文章でありながら、徐々に薄らぎ、失いつつある精神医学の基本について触れたものと理解した。ゆえに、これを広げ学習するだけでも大きな意義があると評者は実感する。

第2章は、個体としての生来的な障害と認識されている自閉症スペクトラムの症状の意味を関係論的視点から問い直し、第3章にまで広げながらそれらは「甘えのアンビヴァレンス」への対処行動であると指摘する。これは、すでに前著（小林、2014）でも展開した著者の精神病

理学論である。

この理論編を基盤に、第Ⅱ部は臨床編となる。ここでは著者は豊富な臨床経験を踏まえながら、自閉症スペクトラムにみられる多様な症状を「関係」、つまり「甘えのアンビヴァレンス」を軸に読み解いていく。その症状は、言葉、行動から心身症様症状、虐待関連症状、精神病様症状と幅広い。

本書を読むことで、自閉症スペクトラムという診断がついた個々の言動を、単に脳障害というレベルから深化し、総体としての人間理解と他者との関係のなかで理解すべきという視点へ導いてくれる。評者には大いに共感できる指摘である。是非多くの医療・福祉・教育関係者に読んでいただきたいと思う。

評者は、いわゆる発達障害とは、決して個体論的障害観だけから考えることはせず、個々の特性と対人関係や生活環境から生じる関係性の躓きが重なりあうなかで生じた生活の障害を持って診断するという立場にある。そのため本書記述の多くに共感し納得し読み終えた。

一方で、どうしても整理できないものも残った。それは、『「甘えたくても甘えられない』というアンビヴァレンス』という表現である。この言葉を評者は、半世紀以上まえの土居健郎の論文（土居、1958）が初出と理解している。別の論文（土居、1960）で土居は『「甘えたくても甘えられない』というのは、『甘えたい心』が抑圧されている状態』であると指摘した。著者が精神病理学論の中心に置いた土居の「甘えたくても甘えられない」という言葉をあえて選択した理由と意義について、もう少し教えていただければと思う。

評者は乳幼児期の自閉症スペクトラムのかたの心理は、自己とモノ、自己と他者が未分化な状態のなかで外界を不安がり恐ろしがするような寄り添ない感覚認識のなかに居ると、臨床経験から実感している。本来、外界のなかに安心の基地となるべき主たる養育者の輪郭が生まれ、自分から分化すべき対象となりそうな1歳前であっても、自閉症スペクトラムのかたは、「甘

えたくても甘えられない」対象以前に、世界を安心の基地として自覚し得にくいのではないかと思っている。故に2歳以後の象徴活動はまだ芽生えなく、それでも脆弱な自分を保護するためのアニミズム的思考を育む。この時期になると、われわれは彼らへの関わりの難しさを痛感する。それ以前は、どう関われば良いか、ただただ暗中模索の日々であったろうと養育者の思いに思いを馳せる。そして評者は、「甘えたくても甘えられない」他者の存在を認識する以前、未分化な状態のなかで環境にいかにも留まるかに呻吟しているのが、自閉症スペクトラムのかたではないかと推察している。

その呻吟について、評者はかつて隠岐の一連の研究から気づかされたことを思い出した。1978年に「自閉症の発達精神病理」という副題で自閉症世界を詳述した隠岐(1978)は、発達学の立場に立ち、自閉症スペクトラムのある子どもとは「〈ヒト〉としての生物学的プログラムによる行動が、何回もレ・プログラミングされながら、カルチュラル・プログラムに移り変わっていく過程のどこかに、乱れがある」とし、それは「子ども側に自生的に生じる」もので、そのため「子どもは仮性の社会隔離状態」にあると指摘した。「だから子どもらはそれゆえに人生のごく初期での母子関係がうまくいかず、〈ひと〉的行動が危うく」なっているという。それでも隠岐は「子どもなりに自己流のかかわり方でもってかかわり、必死に生きる努力をし、生きていくための生活の知恵をみにつける」と評価している。評者は、そうした基盤があると想定したうえで、彼らの必死な努力の一端に「甘え」のアンビヴァレンスもある、と理解したいのである。

評者は本書を読み、隠岐の詳細な観察をもとにした発達精神病理学から四半世紀たち、さらに深化した関係発達精神病理学の登場に心を踊らせた。

著者は、「はじめに」で、「甘えのアンビヴァレンス」について滝川一廣氏と鯨岡峻氏から投げかけられた疑問への回答として本書を纏めた

と記している。

しかし、評者はそれでもやはり、だれにもある「甘えのアンビヴァレンス」を自閉症スペクトラムにおける精神病理学論のキーワードとして重視した視点について、もう少し知りたい。

文 献

- 土居健郎(1958):神経質の精神病理—特に「とらわれ」の精神力学について、精神神経学雑誌, 60, 733-744.
- 土居健郎(1960):「自分」と「甘え」の精神病理、精神神経学雑誌, 62, 149-462.
- 土居健郎(1992):新訂 方法としての面接—臨床家のために—、東京、医学書院.
- 小林隆児(2014):甘えたくても甘えられない—母子関係のゆくえ、発達障害のいま—、東京、河出書房新社.
- 隠岐忠彦(1978):心を閉ざした子どもたち—自閉症の発達精神病理—、京都、ミネルヴァ書房.

(こころとそだちのクリニック むすびめ:
田中康雄)